

# 協働による生物多様性に配慮した公園管理の実践

## 1 茂原市と市民団体との協定成立!!

つい先日、「茂原公園管理事業に関する協定書」に、茂原市長と茂原公園自然愛好会代表(筆者)が捺印して、新年度4/1から同協定に基づく活動が始まることになりました。と申しまして、これまで続けてきた活動を引き続き継続していくので、新たに何かしようということではありません。

重要なことは、行政担当者が変わっても、協定が生きていること。そして同会の活動が何の根拠や裏付けもなく勝手に行われているのではないことを、市民や社会に向けて、堂々と言えることです。



保全作業の様子(令和元年7月9日)

## 2 これまでの経緯

平成29年頃の秋、右上の写真にある斜面で刈り払い機による全草除草が行われ、ヤマホトトギスやキバナアキギリ、リンドウなどが無残にも刈られてしまっている状況を目にしました。

そこで、思案した挙句、同年10月に「市長への手紙」のシステムを利用して、生物多様性に配慮した植生管理を茂原市に提案しました。公園担当者からの最初の回答は差し障りのないありきたりの内容でしたので、再度(しつこく)、提案の詳細と協力する旨を文書で伝えました。そうしたところ、幸いにも、年が明けて担当者と直接会うこととなり、翌平成30年度、保護区の設定、ボランティア団体の立ち上げなど、担当者と相談や作業を重ねることとなりました。

後に、当時の公園担当者(数年後異動)と話した折り、この人(筆者)はしつこそうだ、と思ったので(止むを得ず?)対応せざるを得なかった、との趣旨のことを吐露していました。今になって考えれば、良い(?)巡り合わせだったのかも知れません。

平成30年度10月、茂原市まちづくり条例に基づく市民活動団体として申請し、認定を受けました。

令和元年度より3か年にわたって、茂原市の協働提案事業として申請、採択されて、市から一定の予算をいただき活動することとなりました。相前後して、『自然観察ちば』を通じて緑の羽根募金事業からの支援もいただくことができました。

令和4年度には茂原市景観条例に基づく景観づくり団体として申請し、認定を受けることができましたが、行政特有の縦割りの壁が立ちはだかって、そのことは同活動の実質的裏付けとなり得ませんでした。そこで、公園担当者に、覚書や協定などとして文書の形にすることを二度三度と提案したところ、ようやくこの度の運びとなった次第です。



保全の成果・タムラソウ(令和2年9月1日)  
※写真右はホシホウジャク

## 3 社会情勢

インターネットで調べてみますと、公園の協働による管理については色々な事例が見られますが、生物多様性という言葉は、取り急ぎ見た限りでは見つかりませんでした。

そのような中で、岩手大学農学部演習林報告(2011年6月発行)「都市公園管理における多様な主体の協働—盛岡城跡公園管理体制を事例として—」は、筆者の思いをかなり代弁してくれていました。

「〇〇によれば、都市公園は今後、災害時の避難場所やレクリエーションの場、休養・休息のための散策や憩いの場という「マイナスをゼロに戻すような機能」ではなく、学習、交流、情報発信、文化芸術創造、観光といった積極面、つまり「創造的機能」といえるものを高める方向へ進んでいかなければ

ならない」とあります。

例えば、学習と言えば先ずは環境学習（教育）を想起します。交流と言えば、活動する会員同士の交流や一般来園者との交流、コミュニティ形成の可能性、情報発信と言えばゼロカーボン社会など環境問題に関する社会や地域の取り組みの話題、文化芸術創造と言えば生物多様性そのものをテーマとした表現活動や音楽活動等のコラボなど、観光と言えば保護植物そのものを観光資源とする等。そして何よりも市民自らが、主体性と責任を伴って地域づくりに参画していくことの価値観の醸成が重要と思っています。そのことは市民としての誇りにもつながるものと密かに考えています。

この拙文を読んでくださっている皆さんの中にも、既にそのような取り組みをされている方は少なくないと思いますし、10年以上も前の論文で、考え方としても斬新な考えとも言えません。しかし、筆者が35年間暮らしてきたこのまちでは、歴史的なものなのか地理的なものなのか、はたまた何か別の要因なのか、残念ながら行政の間でも市民の間でも、なかなか理解されていないのが現状、と感じています。



保全の成果・リンドウ（令和3年10月28日）

#### 4 「SDGsの森」の試み

都市公園でよくあるのは、何処もかしこも全草除草（刈り払い）。この発想、前述の岩手大学の論文の趣旨とは逆行する価値観ですが、なかなか覆すのは困難です。

茂原公園では、3年ほど前、幸い当時の担当者の理解を得て、小面積ながら『SDGsの森』を設定し、全草除草の対象から外してもらいました。基本的に上部は常緑樹なので、それほど管理に手はかかりません。そこに、ヤブコウジやマンリョウ、オオアリドオシ、ヤツデ、ヒサカキ、アオキなどを公園内の他所から移植し、本来の照葉樹林の姿にしようと試みています。幸いキツネノカミソリも増えていて、現在のところ何とか順調ですが、これまでも、これからも、一筋縄ではいきそうにありません。

#### 5 最新状況

この冬から春は、気象の変動が激しいことがよく話題になっています。

この活動を始める以前には、同公園内で一株しか確認できていなかったウグイスカグラ、現在では30個体近くを保護しています。千葉県では北部でも南部でも見られるのに、茂原公園では何故少ないのだろうと思っていましたが、単に、刈られてしまっていることが原因でした。現在同公園内の歩道沿いで見られる同種は、1個体を除いて全て保全（保護・移植）活動によるものです。例年ですと3月に入ってからの開花ですが、今年は2週間以上早い2月中旬の開花でした。

一方、今春のアマナの開花確認は3月21日、例年と同じか若干遅かったようです。3月に入ってからの低温傾向が影響しているようです。なお、アマナはいわゆる春植物の典型、草刈り作業がむしろ良い影響を及ぼしているようです。また同公園内では、この数年各所で増えているのが不思議です。



保全の成果・ウグイスカグラ（令和6年3月27日）



アマナ（令和6年3月27日）

（記：茂原市 望月力智）

## 「一番下の妹が強い」

森の中で親と子どもが遊ぶイベントがありました。最初は森の妖精も目を覚ますような竹を叩いてリズム遊び、ハンモックやブランコ、森の素材を使ってアクセサリ作り、親子で楽しんで遊べる日でした。その中の一幕です。

散策路の間に人工物を隠し、いくつあるかを当ててみるゲームをしました。参加した小学生の1年生と6年生が熱心に探してくれました。隠した本人は14個のつもりだったのですが、「17個見つけたよ」と答えてくれました。仕掛けた私は「そうだったかな?」と半信半疑、そういえば追加したかもしれないと思うのでした。ゲームだと乗って楽しんでくれるので遊びとして組み込みました

次の遊びが竹馬です。乗ることはできても、一歩が踏み出せません。お父さんが「前に傾けてゆっくり一歩出す」と声をかけます。1年生も6年生も初めての竹馬でした。一生懸命に練習しますが、なかなか成果が出せません。私が竹馬の前に立って6年生の乗る竹馬の重心を前に倒してバランスを取りながら一歩ずつ歩めるように介添えすると進めるようになりました。

他の遊びをした後に竹馬を再度挑戦しました。すると今度は一人でひよいひよいと乗りこなしているではありませんか。ほんの少しの練習が身について竹馬に乗って動くバランス感覚を獲得したのでしょうか。なかなか見事でした。「パパーツ、やって」の聲に乗せられてお父さんがチャレンジします。なんと見事に乗りこなすではありませんか。これにもビックリしました。こうした運動系のものが得意なのかなと思いました。

竹馬、竹ポックリ、ハンモックをとっかえひっかえしながら仲良く楽しそうに遊んでいたのも、お父さんに「2人兄弟、家では仲良いですか?」と愚問を発してみました。お父さんは「うちの中ではケンカばかりですよ」、「いうことは、聞かない」、「ゲームばかりで!」。自分のことを思い出しても「そうだろうな」と納得するのですでした。

「たまにこうやって自然の中で遊んでいると家の中のこと忘れるので、自分も気持ちがりセットされるみたいです」とお父さんが口にしたひとことが素敵でした。「でも一番強いのはこの子たちの下にいる妹なんです。強いですよ、今日は来ていなかったのですが、「ぜんぜん負けません」とお父さんは強調していました。そんなものなのかなとびっくりしたのでした。

きっと家に帰ると今日の出来事を話すんだろうな。「竹馬に乗れた」、「乗れてない」、「ちょっとは乗れた」と話す光景が目には浮かびます。言い争うことになる「ヤメナサイ」と両親から合いの手が入るんだろうなと。そこですかさず妹が「竹ポックリなんか保育園でやったことあるもん」と口をはさむのかなと。

楽しい一日を作り出していくのは子どもたちであり、支える親である。家族単位で遊ぶのが、なんだかほんわかとした空気に包まれている。その幸せ感が流れているなと感じた一日でした。それにしても「きっと妹は強いんだろうな」と強く思いました。

(松戸市 藤田 隆)



## ナガエツルノゲイトウ駆除と

特定外来生物「ナガエツルノゲイトウ」が、河川・用水路を介して県内で発生区域が拡大しています。定着すると駆除が困難な雑草で、生態系や農業へ悪影響を及ぼす特定外来生物です。用水路、水田の給水口付近や畦畔を見回り、早期発見・早期駆除に努めましょう。



これは千葉県ホームページに載っている注意喚起です。西印旛沼では写真のような特殊作業船が見られます。長いアームの先のマジックハンドで群落を掴み取り、同行する台船に載せて運び出す大掛かりな作戦のようです。市の単位でもボランティアを募集して駆除に乗り出しているようですが、根絶できるか予断をゆるしません。力づくで封じ込めようとする人間に対して、自然界はどのように反応しているのでしょうかその一端が垣間見えるのが次の写真です。

夏の間は旺盛に繁茂して水面を覆っていたのですが、寒中は枯れて筵（むしろ）を広げたようになっています。その下を実際に覗いた訳ではありませんが、状況からしてフナが集まって集団産卵の場所としているようです。そのフナを狙って魚食性の鳥が集まって来ます。鳥だけではなくイタチも頻りにやって来て魚を捕っています。



イタチ



ダイサギ



カイツブリ



カンムリカイツブリ



バン



オオバン



ヒクイナ



カルガモ

サギやカイツブリの仲間が魚を捕るのは良く見かける光景で珍しいものではありません。しかしバンなどのクイナ科の鳥が生きた魚を捕るのを初めて目の当たりにして大変驚きました。もっと驚いたのはカルガモもこの場所でフナを食べた事です。カモでさえも捕れる程に魚影が濃いのでしょう。野生の生物は外来のナガエツルノゲイトウであっても新たに出現した環境を巧みに利用しています。だからと言ってナガエツルノゲイトウ駆除に反対する訳でもありません。

佐倉市 坂本 文雄

## “絵を通じて市川の自然を知ろう！”

### 展覧会のごあいさつ

この市川で初めて展覧会を開催したのが、木内ギャラリーで2006年でした。タイトルをどうしようかと迷ったのが、今も記憶に残っています。

地元の自然情報を連続的に発信しようとは思っていましたが、鳥や昆虫は得意ではないし、じっと静かに長い時間をモデル役してくれそうもない。植物との付き合いが、なんととっても長かった。そこで「スケッチで見る市川の植物」という名前にしたという経緯がありました。

そして今回、市川市アイ・リンクタウン45階の展望施設ですることになったのは、この3月の誕生日でなんと90歳になってしまうんだから、景気良くパーッとお祝いしようという、市川案内人の会の石塚娃子さんの発案らしい。そこが関係の深い市役所の観光振興課に働きかけて具体化したという事情に、感謝しなければなりません。

植物を描いて、単体で飾ると「どこかで絵を教えているんですか？」という質問が不思議と還ってくる。こちらにしては、そこから林全体を、そしてさらには地球規模の課題にまでイメージを膨らませてほしいのに。

そして世の中には、殆ど努力していないような感じなのに、ちょっと描いただけで、すっごく素敵な表現をされる方もいらっしゃる。

もうこれ、ハートの芯まで凍りついて劣等感の塊になってしまう！ 思春期の頃から、生まれも育ちも悪かった、自分に芸術作品など作れるわけがあるはずない、と思いついでいるんです。だからこそ、あえて、スケッチにしている理由です。

でも引っ込んでばかりはいられない。そこで最近はその寄って来る昆虫の絵を描き込んだり、現場の写真をそえたり、ささやかながらも生態系を感じてもらえるようにしようとか、などという方法などをとるように始めました。

描き終わるところから次に待ち受けているのが、これは何を狙っているんだろうか？ 誰のためにこんな面倒な作業をし始めてしまったのかという、果てしない自問自答です。

たったの1個体を気まぐれに選び出してしまったけれど、これが文科省推薦の標準標本などという筈もない。同じ仲間が別の場所で違った表情で、育っているかもしれないのだから。「氏か・育ちか」、これが少年時代からの最大の課題で、遺伝学などを専門にし、この地球にどうして生命体が発生したのかという疑問が今も続いています。

それなのに、「結構なご趣味で、出来上がった時は、達成感があふれて、ご機嫌でしょう！」などという。冗談じゃありません。吸い取られるか、吸い取るかのぎりぎりなんです。

何年かかけて、10回ぐらい歩き回ると、その風土とかの様々が臆気ながらわかるような気になっちゃうのが、これまた恐ろしい。すぐに、その何倍もの“？”に襲われ

るんです。救いようありません。

かつて何回か、植物生態図鑑のようなものを写真で作ろうともくろみました。まだパソコンなどが登場する前の、半世紀以上もの大昔のこと。

重い三脚にアサペン6×7やゼンザプロニカなどのカメラを持ち歩いて、山歩きもしていました。

その当時はカード式の分類整理の方法として、大きなカードに穴をあけて棒を突き刺すとか、紙面の3方向に切れ込みを入れるとかの方法が普通でした。

日本産の植物全部を12桁ぐらいの番号で整理しようと考えた！しょせん無理な話なんです。図鑑によって分類数がかかり違う。それ以上に日本列島には自分の手には負えないほどに植物数が多いんです。お手上げです。絶望です。

以前は、せめて0.5mm位の精度を保ちたいと思っていた。例えば桜の葉の鋸歯は種によって全部表情が違う。ところが、加齢とともに目が疲れてボケてくる、指先が突っ張って細かい線がひけない。寒い夜にはなおさら、ひどいもんです。

それに何日もかかわっていると、他の仕事は何もできなくなる。花の命は短すぎ、次の土日にはもう違う。その季節は1年に1回しかないんです。自分の寿命との闘いか、救いようがありませんね。

この話、やったことのない方には呆気にとられて相手にされないこと必定。だからほどほどにして、にこやかに対応するのがこの世の処世術なのでしょう。

一つが終わるそばから、まだ終わっていないのにその次を考えこんでしまう。今回が生前遺作展でたぶん最後かもね、などというそばから、パートIIは何のテーマでしょうか？などと、気の短い人はおっしゃる。

最近どうも、自分がしゃべることすべてが、遺言みたいに思ってしまう。今回の展覧会が「2024年春」だから、この次は「2026年秋」なのかななどと思ったりする自分を、早くも感じ始めているんです。

無性繁殖するヒガンバナは、永遠の命の持ち主なのかもしれないと思ったりします。ウェルウィッチア(*Welwitschia mirabilis* 和名は奇想天外)のように、砂漠の上を這い回って、元が枯れても先端は伸び続けるようなものが、いくつかあるんですから。

清水不死男さんだったかが、「寝たきりのわがつかみたし銀河の尾」という歌を詠んでいらっしゃる。遙か昔のヒポクラテスさんは「Ars longa vita brevis」といったといわれる。日本語訳は気取り過ぎて「芸術は長く、人生は短し」としちゃったけれど、本来は医術の修行のことで、次世代につなげることの難しさを意味していたという。

さてさて、残りの人生、あと3年ぐらいは次世代を何とかちよっとだけでもお手伝いしていきたいし、後の2年ぐらいは断捨離に徹しないと次世代の方々に迷惑をかけてしまうから、そうすることに決心しました。でも、予定はあくまでも未定です！

2024年3月18日

高野史郎